

景／観／文／化

NPO法人 景観デザイン支援機構 けいかん・きこう

<http://www.tda-j.or.jp>

2015-09-01

目次

□表紙

「良好な景観を創造するためには、
コミュニティの公共性を強化して
いくことが必要条件」

／（写真・文）服部 圭郎

□見開

TDA NEWS

「横浜まちづくり学生会議・第1回
シンポジウム」 高橋 徹

「一般社団法人パブリックデザイン
コンソーシアムの誕生」 伊藤 登

□見開

ランドスケープ事情

「米国・歩行者モール事情報告」

／中野 恒明

□裏表紙

シリーズ：地域から

「三国湊」

／倉橋 宏典

□裏表紙

景観ビジネス最前線

／カサイ工業株

□裏表紙

ホワイトボード

□別冊

景観コラム「TDA サロン 2015」

／西田 幹・杉山 朗子・栗原 裕



シエーナのカンポ広場（Piazza del Campo）

良好な景観を創造するためには、コミュニティの公共性を強化していくことが必要条件

景観とは、それをつくりだす人々の公共意識の鏡である。なぜなら、景観とはその土地に住む人々のコミュニティへの意識を表層化させたものだからだ。物流が発展せず、大量生産も行われなかった時代、建設材料も建設技術も限られていた。そのため、街並みも必然的に同じようなものとなり、街並みの景観も調和のとれたものとなっていた。我々が歴史ある街並みを美しいと感じるのは、この調和と統一性にある。現在では、建物をつくるうえでも数多くの建設材料が使われ、建設技術も多岐に及び、周辺の景観の文脈に反するものでもつくれるようになった。ある高名な漫画家が自宅を極彩色に塗装したら、周囲の住民が猛烈に反対した。漫画家はあくまで自分の家だから何をしようと勝手であると主張したが、そこには景観が公共であるという意識が欠如していた。その昔は、景観の文脈から逸脱するような建物はよほどの富裕層でしかつくれなかったのだが、現在では、多くの人がつくれるようになってしまっている。その結果、良好な景観を創造するためには、コミュニティの公共性を強化していくことが必要条件になってしまった。日本の都市景観でも、優れたところはそのコミュニティが公共性を有しているか、公共性を配慮なくいいほどの圧倒的な私的空間もしくは公的空間である。前者としては神戸の旧居留地、京都の先斗町が、後者としては六本木ヒルズのけやき通り、皇居周辺の空間などが頭に浮かぶ。新国立競技場が大きな問題となったが、オリンピックを開催する合意形成をしっかりと図らなかったという意味において公共性を軽んじた結果であろう。日本の都市の醜悪な景観は、国民と行政がともに低い公共性しか有していないことを示唆している。

明治学院大学教授 服部 圭郎

「横浜まちづくり学生会議・第1回シンポジウム」

「一般社団法人パブリックデザインコンソーシアムの誕生」

■最近の2つの動きについての報告

高橋徹氏（TDA正会員）からは学生を巻き込む形のまちづくりを、一方メーカーを巻き込みつつ公共空間の質の向上を目指す活動の立ち上げを伊藤登氏（TDA監事）から報告してもらいました。



横浜まちづくり学生会議シンポジウム 会場風景



PDC 設立記念シンポジウム 会場風景

1

「横浜まちづくり学生会議・第1回シンポジウム」

～地域インターシップを活用したまちづくり～

高橋 徹

横浜ネクスト 50 副会長
／ TDA 正会員

「横浜まちづくり学生会議」は、若い世代にまちづくりへの関心を高め、参加活動を通して自発的に考え解決する力を養う機会を提供することを目的にしています。具体的には、大学の演習や研究を通して、早い時期からまち（現場）に出て、自分の頭で課題を見つけ、自分自身で解決方法を考え、それを議論の場に出して本当の解決策とするには何が必要かを自身で認識して貰うこと、その経験発表の機会としてこのシンポジウムがあります。今回は第1回でもあり、十分な準備は出来ていないのも関わらず趣旨に賛同頂いた大学の先生方の協力を得て、8グループ／個人の学生のから活動報告を頂きました。紙面の関係で氏名、テーマ等を省略させていただきますが、下記大学（一部大学院）の学生達から発表頂きました。

■横浜国立大学建築都市・環境系学科3年（3グループ）／東京都市大学環境学部環境情報学科 3年（2グループ）／東海大学工学部建築学科卒業、同大学院2年（各1名）／工学院大学建築学部まちづくり学科4年（1名）

また、基調講演や「現場力の強い若者を育てる」～まちづくりを通じた人材育成～というテーマで行われたパネルディスカッションでは次のご意見を頂きました。

1. 横浜国立大学 建築都市・環境系学科非常勤講師／(株)オリエンタルコンサルタンツ顧問：

杉山 和雄



自分の専門領域の他にその関連領域についても統合して考えられる人をT型人才と呼ぶ。大学では専門領域しか教えないが、仕事で成功するためにはできるだけT型になるように学んで欲しい。まちづくりは予め解決案のタイプがあるわけではなく、取り組み方も色々ある。そのような場合は「仮設の提案」から始めて100%ではないが解決に導くプロセスも有効だ。学生がインターシップとして現場に出るとき参考にして欲しい。

2. 東海大学工学部建築学科教授：

加藤 仁美



学生には、色々なまちを体験させるようにしているが、地域に役に立つことを調べて地域に返すという姿勢でやっている。そのためには地域の人との信頼関係が大事で、時間をかけて取り組んでいる。学生にとって何が役に立つかと言うことでは、地域の中には様々な人生論があるということを知ることが重要。地域と学生がお互いに刺激を受ける形で役に立つ交流を引き出したい。

3. 東京都市大学環境学部環境創生学科教授：

室田 昌子



研究室での取り組む地域連携の活動事例は増えているが、その中でも10年以上続き、大学が入ることで継続性が生まれている事例も出てきた。学生にとって喜んで主体的に活動できる状況を

ランドスケープ事情

「米国・歩行者モール事情報告」



写真1：フレスノ・フルトンモールの最期の姿（2015年撮影）、近々改造着手され、車の進入する道となる



写真2：広場に置かれたフルトンモールの銘板



写真3：水の枯れたフルトンモールのデザインされた水路

1960～70年代の米国各地に出現した歩行者モールの総数は140余、その流れは欧州都市における中心市街地再生運動に端を発し、全米で花開き、わが国の旭川買物公園（'68）、横浜イセザキモール（'72）にも繋がった。欧州では完全に定着したと言えるが、いま米国の多くの都市では既に110余例が消滅し、現存するのは30事例程度になってしまった。アメリカン・ランドスケープの名作と謳われたガレット・エクボのフレスノ・フルトンモール（'64）、ローレンス・ハルプリンのニコレット・モール（'67）も含まれている。一方で、建築家I.M.ペイとランドスケープ・アーキテクトのローリー・オーリンのコラボレーションによるデンバーの16番街トランジットモール（'82）は後に延伸され、2014年には無料バスが増強された。この違いは何であろうか。

1) フレスノ・フルトンモール（カリフォルニア州）：'64年、ショッピングモールの父と言われる建築家ヴィクター・グルーエンとガレット・エクボの共作でカリフォルニアのオアシス都市フレスノの中心部に誕生したフルトンモールは、後に全米の歴史的遺産にも指定されるなど、高い評価を得た作品でもある。この5月に最期の姿を確認すべく訪れたが、沿道店舗の多くは閉鎖、屯する失業者の姿、この荒んだ光景は何に起因するのかを自問自答、この半世紀の間に都市の重心は大きく移動してしまったようだ。

作ること、また学生が代替わりしても継続出来ていくことがポイント。今の学生は外出も実体験も少なく、地域を見ても自分から発見したり問題意識を持たない学生が増えているように思う。まちづくりは、先ず現場を見て問題を発見することからはじまり、解決・調整能力は体験の中から養ってもらうしかない。

4. 工学院大学建築学部まちづくり学科教授：



星 卓志

まちづくりの現場は実務の世界であって、学生が外からいくら調べてみても限界がある。しかし、現場の中に入り見聞することで、学生達が自分の価値観を磨き、志を抱くことは必要で、そのプロセスとして現場に入ることは大事。一方、それだけではだめで、歴史、理念、理論などの価値体系の蓄積を勉強し、現場のなかで何をしたいのかというものを見つけることが一番大事だと思う。

5. 認定NPO市民セクターよこはま事務局長：



吉原 明香

横浜市の市民活動事業の中で、自分自身を変えたいという思いを持ってインターンの形で1年間参加した若者の成長過程を見てきた。彼は「勇気を持って行動し、外の世界を確認していくことで自分のオーラ（自信）が生まれる」という言葉に励まされて様々な活動に参加した。その後、これから仕事をする上で、何かすぐに役立つことはできないが、人に寄り添うことはできるという世界観、自分に対する信頼感を得ることができた。

3

「一般社団法人パブリックデザインコンソーシアムの誕生」



伊藤 登

PDC 副理事長／TDA 監事／
プランニングネットワーク代表

私達の身の回りの都市空間は使いやすく美しくなったか。確かに個別に丁寧にデザインされた空間は美しく使い勝手も良い。だが、多くの公共空間は私達の理想と異なる。短時間で多くの公共空間整備が求められた高度成長期と大きな差がないと思う。

何がいけないのか。都市環境デザイン会議（JUDI）は、20年余に渡るモニターメッセで製品の質を高める持続的な活動を実施してきた。しかし、メーカーの努力にも関わらず優れた製品が採用されることが常ではなかった。モニターメッセの趣旨に賛同するメーカーは数多くのメーカーの中にあって少数であったし、質の高い標準品を供給するという発想が、メーカーにも設計者にも乏しかった。またデザイナーと自称する設計者は、自らデザインした一品物を志向する傾向が強かった。これは公共空間に関わる「モノ」の問題である。もっとも「モノ」がよければ、良い空間ができるわけではない。公共空間における「空間設計」の問題は、設計者や発注者の資質とこだわりの有無によるところが大きい。

一方、JUDIと都市づくりパブリックデザインセンターが行った「都市の魅力と公共空間活用（2002）」では、公開空地等の制度が使い勝手を大きく規定していることが明らかにされた。10年以上も前に指摘

されたことが、今もあまり変わっていない。「制度・基準」の問題は使い勝手のみならず「モノ」の問題の根幹にある。メーカーも設計者もこれに疑問を持ちながらも、異を唱えることは無かったのである。

そのような状況からの脱却のため、JUDI事業委員会のメンバーが主体となって一般社団法人パブリックデザインコンソーシアム（PDC）を設立した。公共空間の使い方や整備の来し方を尊重しつつ、新たな公共空間の在り方の行く末を提案し、それを実現する制度、体制にも言及し、普及・啓発活動も含めた様々な豊かな公共空間創造に関する活動も行っていきたいと考えている。また、その空間の創造を保証する、公共事業に適用可能な標準的な製品を開発することも重要な役割である。デザイナー、プランナー、メーカー技術者が連携し、リーズナブルで質の高い豊かな公共空間を保証する製品を開発し、社会に提供したい。

高度成長期にかけての人口と経済が伸びた時代に多くの公共空間が整備されたように、人口が減少するこれからの時代は大きく公共空間のあり方や利用の仕方が変わる時代となる筈である。免許人口の減少は、自動車交通の減少をもたらし、道路の空間配分は必然的に変わっていくであろう。

人口減少、インフラの老朽化、2020年オリンピック・パラリンピックを契機とする更なる海外からの訪問客の増加、様々な社会要求の変化が予想される中、美しく、使いやすく、居心地の良い、豊かな公共空間を実現するためにPDCは尽力したい。

芝浦工業大学教授・アブル総合計画事務所代表／TDA正会員 中野 恒明



写真4：2014年のミネアポリス・ニコレットモールの風景、路面も継ぎ接ぎ状態がわかる



写真5：2014年のデンバー・16番街トランジットモールの風景、ここは大いに賑わっている

2) ミネアポリス・ニコレット・モール（ミネソタ州）：'67年に緩やかにバス車線がカーブを描くトランジットモールとして誕生した。これは'70年代以降の都心の荒廃を食い止める大きな役割を果たした。後に1.3kmから2.0kmに延伸されたのだが、その賑わいの無さが気になっていた。2013年に全面改修の設計コンペが始まり、最終審査の結果ニューヨークのハイレイン遊歩道の設計者の一人、ジェイムス・コーナーが選定された。その提案は緑量の充実、多機能照明システム、路上の可動イスでの市民休憩、オープンカフェや各種イベント対応など、実にソフト指向でもある。改造の完成は2016年と言う。

3) デンバー・16番街トランジットモール（コロラド州）：苦戦する事例とは異なり、沿道には商業施設やレストラン、オフィスなどが並び、多くの歩行者で賑わい、そこに行き交う双方向の無料トランジット・バスのフリーモールライド（Free Mall Ride）、その光景は欧州都市のモールと見紛うほどである。完成は'82年、延伸は2002年、それに2014年の第二の無料BRT、鉄道のユニオン駅のリノベーションと地下バスセンターの整備と自動車から公共交通へ、そして職住近接の都心居住へと大きな展開を見せつつある。これこそ当地で'60年代当時の都市計画行政に異を唱えた女性活動家ダナ・クロフォードの功績に負うところが大きいと見る。当時花開いた市民層の意識改革が今の人間的環境都市実現に繋がっているような気がする。明らかにアメリカの他の都市とは異なるのである。

「三国湊」

空家を使い町並みを守る



福井県の北部、坂井市に位置する三国湊。中世より越前の物流の中核を担い、室町時代には「三津七湊」のひとつに数えられ、江戸中期以降には、北前船交易の発展に伴い物資や富の一大集積地として繁栄を極めた。しかし明治期、鉄道が物流の中心的役割を担いだと、海運で栄えた他の湊町と同じく、まちは輝きを失っていく。現在、九頭竜川に沿う僅かな平地に連なる町家や蔵のつくる町並み、変わらない町割りには往時の風情を感じさせてくれる。特に5月の三国祭では、華やかかりし頃の活気を垣間見ることができる。

三国湊のまちづくりは旧森田銀行の保存運動から始まり、約20年の歴史がある。しかし、全国の地方都市と同様、近年の高齢化・人口減少の速度は著しく、空家の増加とこれに伴う町家の取り壊しや空地化といった現象が加速する中、町並み景観をいかに保全していくかが大きな課題となっている。

一般社団法人三國會所では、「三国湊町家活用PROJECT」を立ち上げ、空いた町家を資産として活用することで町並みを守る活動を行っている。空家の所有者から物件を借り受け、人を惹きつける新たなテナントや住まい手を公募等により呼び込む取り組みであり、今秋には蔵を改装したフレン

チデリや町家を活用したゲストハウスがオープンするなど、一定の成果を生んでいる。

しかし、特に近年の空家の取り壊しのスピードはあまりに速く、早急に次の手を打っていく必要がある。まずは、空家の情報を集約し、所有者と使いたい人をつなげる分かりやすい仕組みを構築すること。所有者に対して、空家をうまく利用転換したモデルを示しつつ、使い方の提案を行うなど、物件を提供したくなるように促していくこと。最も重要なのは、地域の方々と、町家が残る町並みや三国の景観の価値を認識して共有することであり、そのための地道な取り組みを継続していかねばならない。

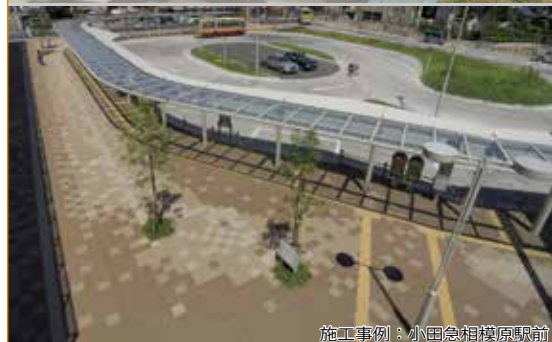
景観とは、都市に積層された歴史、都市形成の思想、暮らし方の作法が表出されたものであり、都市に暮らす日常が滲み出たものであると思う。その意味では、景観は都市の文化そのものであり、都市住民のアイデンティティーであり、人を惹きつけ、観光資源ともなりうる、紛れもない資産である。その都市ならではの景観を深く読み解き、維持できるかどうか、地方都市が生き残るための試金石となるだろう。

三国湊の景観を守り、生きた町として持続させていくために、取り組みの第2ステージは始まったばかりである。

景観ビジネス最前線



施工事例：蘇我スポーツ公園



施工事例：小田急相模原駅前

セラック

透水性セラミックブロック

水を透すから
雨の日でも足元さわやか
すべらないから安心。

「セラック」は雨天の舗装路での滑りや水ハネを防止、歩行者が安全で快適な環境を得るために、開発された新しいタイプの舗装材です。焼き物の質感を持ち、多彩な色調と組み合わせによって暖かで、安らぎのある、美しい都市（まち）づくりを提供します。

カサイ工業株式会社
KASAI INDUSTRY CO. LTD.

愛知県高浜市碧海町 1-1-4 〒444-1324
TEL 0566-53-0374 FAX 0566-53-1759
担当：片岡 (090-2774-4052)・中村

ホワイトボード

30号の発行を迎えることができました。これは読者ならびにTDA会員の皆様の御賛同、御協力の賜物と感謝を申し上げます。今号の「巻頭文」～「地域から」までの記事はバラバラのように見えますが、計らずもそれぞれが主張している事は、ハードとソ

フトの境界を越えたところに「景観」が位置している事をしっかりと謳っていて、まさに節目にふさわしい充実したものになったと自負しております。またご好評ご予約を頂きました「景観講座本」も近日中に発行されます。重ねて感謝申し上げます。

TDA
TDA JAPAN
頒価 ¥100

NPO法人 景観デザイン支援機構 事務局

私達は下記の企業・団体のご協力をいただいています。

(株)昌平不動産総合研究所／(株)住軽日軽エンジニアリング／都市環境デザイン会議／(株)コトブキ／三井不動産(株)／(株)都市環境研究所／東京ガス用地開発(株)

〒111-0043 東京都台東区駒形 1-5-6 金井ビル 3F
Tel: 080-6722-4114 Fax: 03-3847-3375 E-mail: main@tda-j.or.jp
http://www.tda-j.or.jp https://www.facebook.com/tda.public

【編集：(株)アーバンプランニングネットワーク】2015091000

当機構で2013年度まで開催されていた「TDA サロン」が2015年5月20日(木)、復活開催されました。

TDA サロンは、景観に係わる幅広い人たちが気楽な雰囲気の中で本音をトークする場です。景観を構成する素材(石や木、塗料等々)に焦点を当てたり、色、植栽、パブリックアートなどといったフレキシブルなテーマを設け、実務者を話題提供のゲストとしてお招きし、活発な議論をしていただくというものです。

今回のTDA サロンは、『道路空間をとりまく色彩の最前線』と題し約30名ほどの参加で開催されました。なお、会場は(株)ノナガセのご厚意により会議室をご提供いただきました。

サロンのとりまとめ役であり、司会進行をした西田幹氏(TDA 理事)より今回のサロンの概要ならびに今後の展開等について、また話題提供者である杉山朗子氏(TDA 正会員)、栗原裕(TDA 事務局長)に当日提供された話題の概要を報告していただきます。

「TDA サロンの復活：景観材料をとりまく問題提起」



西田 幹
TDA 理事/(株)デジタルキアロ

今年度からTDA サロンでは、これまでの景観材料を中心とした情報発信から「景観材料をとりまく問題提起」をテーマとして各専門家から事例を発表していただき、景観デザインに共通した課題を掘り下げていきます。景観材料企業はそれぞれ専門分野での開発に注力していますが景観デザインの質の向上を図っていくためには、「トータルデザインの確保」や「事業調整における制約」が重要な共通条件となります。今回は、「道路色彩をとりまく色彩の最前線」をTDA 正会員の杉山さん、栗原さんを囲みサロン形式で行いました。会場からも、学生、企業の女性社員の皆さんから鋭い質問が講師に投げかけられました。道路色彩では、歩道デザインの維持管理、連続性、民間と公共空間の分断、視覚障害者誘導ライン、自転車占有道路のブルー車線などいくつかの事例で問題提起がなされました。

道路構造については、警察協議の実態、道路交通法の規制など目に見えない要素が大きく景観材料の色彩、モジュールに関わっています。短い時間で解決策までの議論は難しいのですが、現状の問題点の共有化は図れたと思います。皆さんと一緒に考える機会を重ねることによって景観材料開発ひいては景観デザインの向上に繋がっていきたくと考えています。

今後TDA サロンは、景観企業、都市計画者、各分野の専門家をお招きして熱く語る会にしていきます。テーマは、その時々に関心あるテーマを設定し充実したプログラムを用意していきます。関心のある皆様のご参加を心よりお待ちしております。



「道路空間をとりまく色彩の最前線」



杉山 朗子
TDA 正会員/(株)日本カラーデザイン研究所

道路空間関連の色彩の現状はバラバラ

景観の色彩が注目されている中、道路空間関連の色彩の現状についてみていきたい。東京都内を歩いていると道路付帯物等の色の不統一に目がいく。管理者の違いがその一因である。



道路付帯物の色彩・形状は混沌としている

現状では景観の色彩と言うと建築の色のことを言うと考える傾向があり、みち及びそれをとりまく色の重要性についての認識は非常に弱いと言わざるを得ない。しかし、みちの色がそのまちの雰囲気や左右している事例は多い。人が集まるまちや、歩きたくなるみちは、色やデザインが考慮されている。



左：丸の内中通り
中：日光の杉並木
右：日本橋界隈の歩道

近年修繕された歩道を見ると従来と異なった色系統をはめ込んでいる事例が多く見受けられるようになってきた。現在類似の色がないということらしいが、あまりに唐突である。



また、路線全体で修復した場合、非常にはっきりしたコントラストの組み合わせなども見られる。公園の補修などでも

同様である。目がチカチカするほど刺激的である。

土の色、自然の色の研究の活用の推奨

旧来、みちは土を固めたり石畳にするなど、自然に近い色であった。現在でもその様な方向性で色を考えると地域らしさも出て使いやすいのではないだろうか。レンガの色からの発想も実際の色を測定して参考にしていったら如何だろうか。



日本全国の土の色調査の一部 立川に残る日野煉瓦の色

土木工作物の色は周辺との関連で配慮したい

歩道橋や橋梁なども、まちの景観を形成する重要な要素である。路線ごとに色が決まっている等のルールもあるだろうが、周辺との関連など多面的に検討して考えることも今後検討していったら、市民にもっとなじみ深いものになるのではないだろうか。



これらの現状は多くの人にワークショップなどを通じて目を向けてもらえたらと思う。専門家として携わっている方々は機能優先の傾向が強いと思われるが、空間の中での色彩の効果を再度見直していただき、新設・修繕に関わらず計画の際には是非検討の機会を持ってもらいたいと期待している。

「舗装材と道路表示・路面標識」



栗原 裕

TDA 事務局長／(有)ユー・プラネット

「道路空間をとりまく色彩」を考えると、舗装材、道路標示・路面標示等を抜きにして考えることはできない。

舗装材による景観への影響は色ばかりでなく、模様を描いたり、年変化による色あせ、工事の舗装復旧等もある。



● 道路に模様を描く

● 工事の舗装復旧

また、路面にはいろいろな標示が書かれているが、これに

は道路交通法に基づいた「道路標示（道路標識と同じ機能・全国共通）」と注意喚起を施すための「路面標示（法定外標示等・都道府県等により個別に設定）」の2種類がある。

「道路標示」については法律により定められているので仕方ない面もあるが、「路面標示」に関してはもっと景観に配慮したものに置き換えることが可能である。たとえば、横断歩道のライン（白）は法律に基づくものであるが、下の写真のように赤や緑のラインを入れる必要があるのか疑問が残る。



● 「赤白」の横断歩道



● 「緑白」の横断歩道

スクールゾーンやイメージハンプにしても安全性を確保したいことはわかるが、もっと簡潔にできないものだろうか。ごちゃごちゃ書けば景観ばかりでなく、標示そのものの視認性も落ちてしまうのではないかと思う。

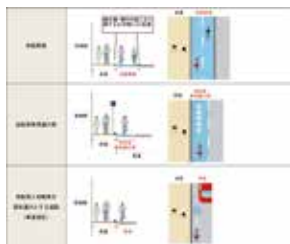


● スクールゾーン



● イメージハンプとスクールゾーン

今話題になっている「自転車通行帯（青く塗られているものが多い）」についても、このほど警視庁は「自転車ナビマーク」という新たな「路面標示」を制定した。



● 自転車通行帯



● 自転車ナビマーク

下の写真のシール式の路面標示も新旧のマークが混在しているし、数年すると見えなくなってしまう。今後は安全性・機能性ばかりでなく、景観にも考慮するよう望まれる。



● 新マーク（浅草通り）

● 旧マーク（浅草通り）

● 消えたマーク